

女子短期大学生の体験活動等に関する一考察

- 保育者養成の立場から -

塚 田 まゆみ

Teacher Training For Nursery School

- an educator's view of internships for Junior college female students -

Mayumi Tsukada

子どもたちを取り巻く環境は、めまぐるしいと言って良いほど変化し、その結果、保育者に求められる役割や機能は複雑多岐にわたってきている。子どもや保護者の立場に立ちながら、子どもの最善の利益を保障し、保育を实践できる保育者の役割はますます重要なものとなっている。

保育者養成に携わる者として、このめまぐるしい保育情勢の変化を踏まえつつ、より質の高い保育者の養成を念頭に、学生のこれまでの体験活動等の実態や現在の考え方を調査した。

個々の学生で体験活動等に差異が認められるのは当然のことであるが、全体的に、体験活動、中でも子どもとのかかわりが少なく、したがって、それらを基盤にはぐくまれるであろう生きる力を備えた人間性豊かな保育者として、即、保育現場で活躍できるまでには至っていない現状がある。しかし、学生は、短い大学生活の中で、社会のニーズに応えられるより質の高い保育者を目指して、気概作り、知識技能面の習得など努力している。今後は、直接的に子どもとのかかわりができるような体験の場をより多く仕組んでいく必要がある。

Key words : [女子短期大学生] [保育者養成] [体験活動] [豊かな人間性]
[生きる力]

(Received September 15, 2005)

I はじめに

少子高齢化、女性の社会進出、さまざまな社会改革、そして、複合家族から核家族へという家族形態の変化や、近所付き合いに総称される地域共同体の変化等は、家庭生活や子どもの育ちに大きな影響をもたらしてきている。その結果、保育のあり方も対応の仕方も当然変わらざるを得ない状況にあり、保育者養成校においても、時代のニーズに沿った多様な保育サービスに対応することのできる質の高い保育者の養成が求められている。

ところで、保育現場において保護者が保育者に望むことの第一は「子どもが人間性豊かに育

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番地1号)

つように保育してほしい」ということであり、今も昔も変わらず「豊かな人間性を備えた保育者」に大きな期待が寄せられている。子どもたちが集団生活を通して基本的な生活習慣を身につけ、季節や自然に親しみ、文化的・伝統的行事を通して、人間性豊かに育っていくよう保育してほしいと願っているのである。これらは、時代がいかに変わろうとも保育者として求められる変わらない部分、変化してはいけない要素、つまり保育者としての「本質」と言えるものであろう。

さらに、行く先不透明の今日の社会情勢から鑑みるに、保育者には「生涯にわたる人間形成の基礎を培う」保育の現場において、子どもたちから自分で課題を見つけ、自分で学び、自分で考えることのできる資質や能力、それを支える正義感や倫理観などの豊かな人間性を備えた「生きる力」を培っていくという役割がある。この「生きる力」は、様々な体験や活動を通して、子どもたちが主体的に考え、試行錯誤しながら自ら解決策を見出していくプロセスにおいてこそはぐくまれるものである。

「人は人によって人になる」と言われる。子どもたちが「生きる力」をはぐくみ、豊かな人間性を備えた人になっていくためには、豊かな人間性を持った人に出会わなければならない。子どもとかかわる保育者自身が「生きる力」を備え、人間性豊かであるべきことは言うまでもない。「生きる力」はより多くの経験をするにより養われていくものであり、より多くの経験の積み重ねにより自ら判断し、自らバランスをとりながら感受性を磨いていくものである。

そんな中、主に保育者を目指しているこども学専攻の学生は、勉学や将来の進路(就職)について目的・目標を持って入学した学生が大半を占める。しかし、少数ではあるが、入学の動機が単に「子どもが好き」「就職率が良い」などということで、確固たる目的を持っていない学生もいないわけではない。さらに、目的意識は持っているとしても、これまでの育ちの未熟さや生活経験の乏しさ、社会性の欠如、規範意識の希薄さなど、子どもをはぐくむ立場を目指す学生の資質としては様々な問題点を抱えている学生もいると感じている。

平成10年、当時の文部省は「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」を実施しその結果を発表した。それによると、お手伝いしている子どもほど道徳観・正義感が身についているという傾向があった。同様に生活体験や自然体験が豊富な子どもほど道徳観・正義感が身につけられており、「青少年の生きる力をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」の中で、子どもの心の成長には、地域での豊かな体験が不可欠であることを答申している。

以上のことを踏まえ、期待され社会のニーズに応えられる保育者の養成に携わる者として、学生のこれまでの体験活動や規範意識等の実態・考え方を調査し、その上で、人的環境としての保育者の在り方について、今、学生に何を伝えるべきか、学生とどのようなかかわり・学び合いをしていけばよいのかを探ろうと考えた。

ここでは、保育者を「子どもの幸せ」「子どもの最善の利益」を考える保育にかかわる人(幼稚園教諭・保育士)として論ずることとする。

Ⅱ 研究方法

1 調査対象

短期大学のこども学専攻（保育者養成課程）の女子学生 1年生46人 2年生47人
合計93人

調査の項目によっては、同上1年生のみ46人 あるいは2年生のみ47人で調査

2 調査項目・内容と調査期日等

今回の調査結果と、これまでに公表された他の調査結果とを比較検討することが多少なりとも可能となるように、平成10年文部省が実施した「子どもの体験活動等に関する実態調査」や規範意識等に関する調査の項目とほぼ同じになるように項目を設定して調査した。そして、公表された調査結果の中から、男女別に報告されたものに関しては女子に関するものと比較することにした。

さらに、今回調査集計した結果を調査対象者自身に示すことで、調査結果について考察する場・自己と向き合うことのできる場を設けることとした。

体験活動等に関する実態の調査

生活体験に関するもの6項目・自然体験に関するもの8項目・その他に自他とのかかわりに関するもの5項目を設定し、回答は主に「何度もある」「少しある」「ほとんどない」の3件法で選択するよう求めた。規範意識に関するものは、8項目を設定した中から本人の自由でよいと思う項目を選択するよう求めた。

調査時期：1年生 2005年5月12日

2年生 2004年6月22日（1年生時に実施）

社会に出ることへの意欲の調査

「社会に出ること」に関する期待について把握するために「仕事を持って社会で活躍するのが楽しみだ」「生計を立てるためには仕方がない」「社会に出ることを考えると憂うつだ」の3件法により一つを選択するよう求めた。

調査時期：1年生のみ 2005年5月12日

生活体験・自然体験・家庭地域における自他とのかかわり・規範意識・社会に出ることへの意欲に関する集計結果に対する学生の思い（自己と向き合う）の調査

調査時期：1年生のみ 2005年6月28日 こども学原論の講義の中で

テーマ： 家庭教育・幼児期からの心の教育の視点から

～豊かな人間性をはぐくむために～

5月12日の実態調査の折に個人で記入したものを返却すると同時に、全体を集計した結果をグラフ化したり表化したりしたプリントも配布した。自分と対象者全体の両者を比較して考察したり自分自身を振り返ったりする機会を設け、様々な思いを自由記述式で述べてもらった。

後記の「調査結果と考察」の欄で「学生の感想」として、学生自身が考察したり自分と向き合っ感じたりした思いの中からいくつかを抜粋して紹介する。ただし、この場合、女子短期大学生全体の集計結果だけを示す。

「豊かな人間性を備えた保育者とは」に関する調査

保育者の本質に迫る保育者像について、現段階で学生自身がどのように捉えているか実態把握をするとともに、豊かな人間性を備えた保育者になるという自覚を持ってほしいという願いもこめて記述式でアンケート調査を実施した。

調査時期：2年生のみ 2005年7月13日 設定された項目に従って授業外で自由記述

質問項目は以下のとおり

- ①豊かな人間性を備えた保育者とはどんな保育者をいうのだと思いますか。
- ②自分自身を振り返って、不足しているものがあるとしたらどんなところだと思いますか。
- ③それは、どうすることで克服できると思いますか。
- ④豊かな人間性を備えた人になるために、幼いころどんな経験をさせる必要があると思いますか。また、なぜそう思いますか。

「1年生前期を振り返り、保育者としてのプロ意識は育ってきているか」に関する調査

調査時期：1年生のみ 2005年7月29日 自由記述・提出

Ⅲ 調査結果と考察

前述のとおり、平成10年7月文部省は全国の小学校2,4,6年生および中学校2年生、合計約1万1千人を対象にアンケート調査を実施した。今回の調査対象となった学生は、平成10年当時は小学生であり、この調査対象となった子どもたちとちょうど同年代である。しかし、小学生時にこの調査の対象となった者はいない。

文部省の示した調査結果と今回の調査結果の比較検討に際しては、対象者が異なる上に、対象時の年齢が異なるので、それぞれの学生が小学生時以降にも体験の機会に恵まれたであろうことや、心の成長、周りからの働きかけ等、諸々の条件が異なることは考慮しなければならない。

1 生活経験・自然体験

生活体験

調査結果は図1に示すとおりである。

自然体験

調査結果は図2に示すとおりである。

女子短期大学生の体験活動等に関する一考察

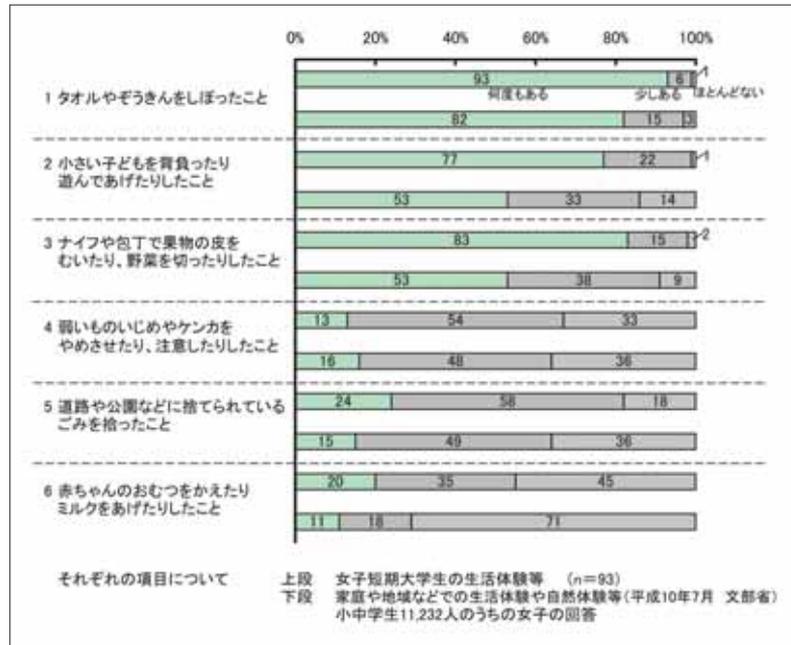


図1 生活体験

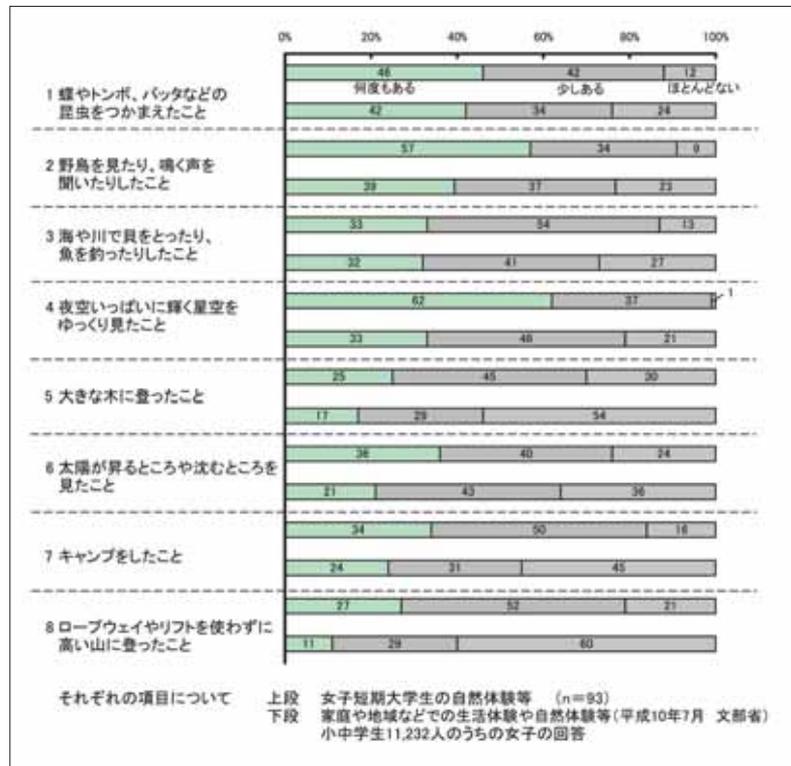


図2 自然体験

学生の感想から抜粋

- ・私もほぼ他の人と同じような経験を同じぐらいしていると感じた。
- ・タオルや雑巾を絞った経験のない人は学校での掃除の時間は何をしていたのだろうか。
- ・自然とのふれあいが少ない。
- ・日本にもまだ自然は残っている。
- ・けんかをやめさせるのは非常に難しいことであると思う。
- ・赤ちゃんとのかかわりが少ないことに驚いた。
- ・私は田舎で生まれ育ってたくさんの経験ができてよかった。感謝している。
- ・楽しむ経験は多い。苦しむ・悩む・やりぬく経験をした人は少ない。
- ・たくさんの経験、体験をしていくことで感性が豊かになっていくのではないか。

自然、人間、社会との体験活動を強化することの利点は、自然や現実社会と接触することを通して、生きていることの意味、人権の尊さ、他人とのかかわり方が学べることである。人間としての本能や様々な感覚機能の発達には、実体験から生まれる部分が多い。人は自然、人間、社会との直接的なふれあいを通じて、知的想像力や社会性が育成されると古くから言われている。

調査項目に従って平成10年度のものと比較してみると、今回の調査対象者がすべての項目について多くの体験をしている。特に、タオルや雑巾を絞ったこと、ナイフや包丁で果物の皮をむいたり野菜を切ったりしたことの項目に関しては、やはり女子短大生として「何度もある」がほとんどを占める。しかし「ほとんどない」の学生がわずかではあるが存在することも事実である。弱い者いじめへの注意やごみ拾いの項目に関して「何度もある」との回答が少ないことは残念な結果である。

保育者を目指す学生でありながら、小さい子どもを背負ったり遊んであげたりしたことの項目では23%の学生が「少しある」と「ほとんどない」の回答であり、赤ちゃんのオムツを換えたりミルクをあげたりしたことの項目ではわずか5分の1の学生のみが「何度もある」と回答している。兄弟数の減少、少子化などの影響からか乳幼児とのかかわりは非常に少ない。

自然体験に関しては、文部省が示したものとほぼ同様の傾向が伺われるが、野鳥を見たり鳴く声を聞いたりしたことや夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと、キャンプをしたこと、高い山に登ったことなどの体験について、「少しある」「ほとんどない」の割合が少なくなっている。地域性や調査時期以降にこのような体験の機会に恵まれたことが伺えるのではないだろうか。

2 家庭・地域における自他との関わり

女子短期大学生の家庭・地域における自他との関わりの調査結果は図3に示すとおりである。

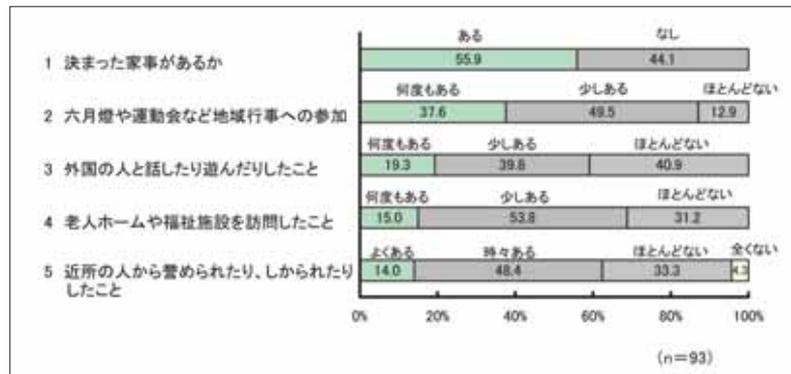


図3 女子短期大学生の家庭・地域における自他との関わり

学生の感想から抜粋

- ・地域の人とのかかわりは薄くなってきている。
- ・家族とのかかわりに対して地域とのかかわりが薄くなってきている。落差に驚いた。
- ・近所の人に誉められたり叱られたりした人が少ない。かわいそうである。
- ・自分からしたいと思っても機会が少なくなっているのではないかと。
- ・ボランティア活動「参加しない」「まったく参加しない」が多いのに驚いた。
- ・教育やしつけが家庭だけのことになっている。地域の人との交流は大事である。
- ・本学の学生は、結構コミュニケーションがとれていると思う。

大学生になった今でも、決まった家事を持たないで家事の分担をしない学生がほぼ半数いる。少子化、核家族化に伴い、家庭で必要とされる子どもたちの役割が減少し学歴社会の弊害も手伝って、子どもたちの仕事は勉強に代わり手伝いのチャンスも除外されたという指摘もある。「基本的生活習慣の確立」や「心の教育」を考えた場合、家庭の果たす役割は非常に大きいわけであるが、現代の家庭では大切なものが失われてきている現状が伺える。

さらに、地域との交流となるとずいぶん希薄になっている。近所の人から誉められたり叱られたりしたことが全くないと回答した者が43%あり、今回の調査からも十分そのことが伺える。専門の保育者として、育児不安を抱えつつも近所に相談相手がいない親（園に通わせている子どもの保護者のみでなく、地域全体の保護者が対象）への支援を期待される所以である。

3 規範意識

規範意識に関する比較「本人の自由でよい」と回答した者の割合を図4に示す。

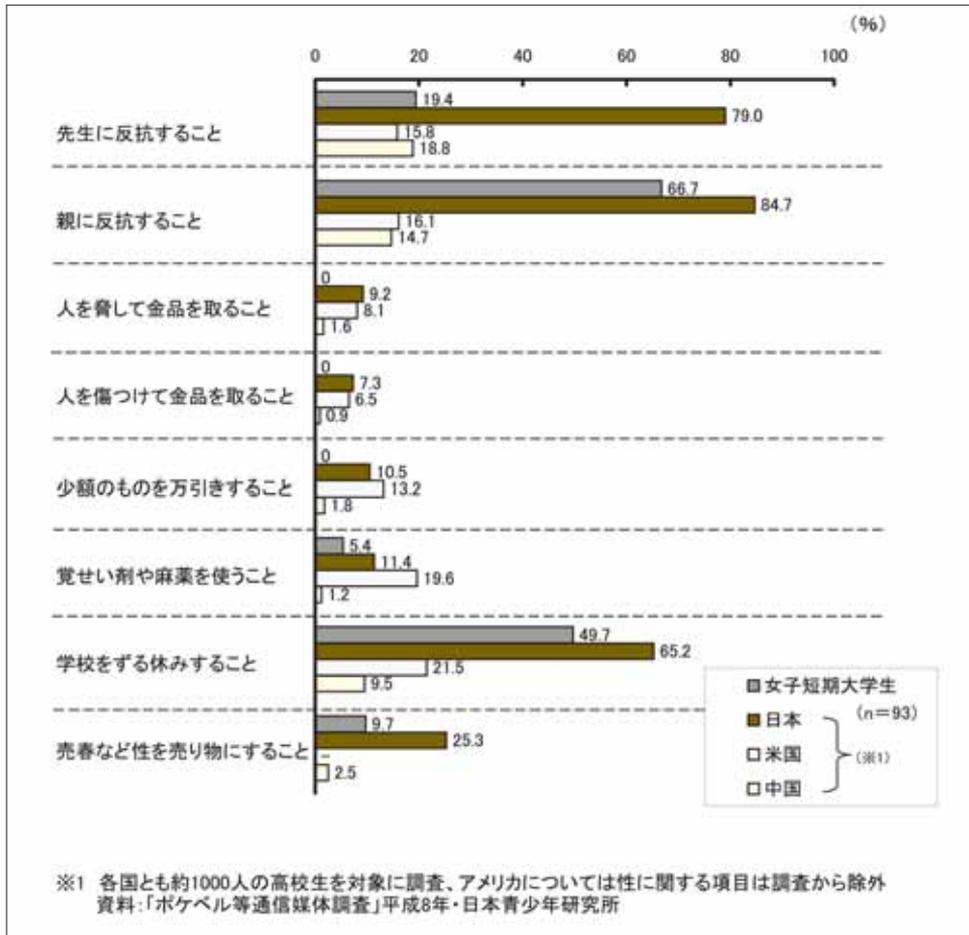


図4 規範意識に関する比較
「本人の自由でよい」と回答した者の割合

学生の感想から抜粋

- ・すべて「本人の自由ではよくない」と答えた人が少ない。
- ・反抗すること = 成長のしるし だから悪いことではない。
- ・反抗したい時期があると思う。
- ・反抗するのは自由である。
- ・先生や親への反抗 = 自分の考えを示すひとつの手段である。
- ・自分の都合のいいようにしか考えられない人がいるのだな。
- ・自分はよくても、相手を傷つけたり、誰かを悲しませたりするのはやっぱり「本人の自由でよい」とするのはいけない。
- ・してはいけないことはきちんと教えるべきである。

集計結果について最も多くの意見が記入されていた項目である。主張することと反抗することなど文言のとらえ方による意見の違いもあろう。対象の学生の中には「今どきの学生は……」と言われそうな、自由のはき違えをしている者もいるように感じる。

ところで、このごろの少年犯罪の多発化、低年齢化の背景として規範意識の低下があげられている。犯罪行為については大多数の人が「してはいけない」と考えている。しかし、わずかではあるが「してもよい」「やむをえない」と考える若者が増加している。その要因のひとつに情報の氾濫があげられているが、目の前の学生に対しても、情報の収集には自己責任が伴うこと・判断は本人がきちんとすべきであること、つまり、学生自身で自分にとって必要な情報は何であるのかを選択して身につける能力や、自分にとって必要な情報を判断する力をつける必要があると思う。

近年小学校等における道徳の授業においてさえ、「生きる力」云々と称して自分で判断させることの強調のあまり、結論を本人の判断に任せることをよしとする向きもあるようであるが、果たしてこのままで良いものであろうか。

今回の調査結果からは、生活体験、自然体験が豊かな学生ほど正義感や道徳観がはぐくまれているという相関関係および結論を導き出すまでには至らなかったが、調査対象の学生の中には、自分の都合だけで判断するのではなく、相手や周りの対場に立って物事を捉えようとしているすばらしい学生も存在することがわかった。

今回、全項目について「本人の自由ではよくない」と回答したものは全体の24.7%であった。この結果は、喜ぶべき結果なのか憂慮すべき結果なのかどう判断すべきであろうか。

4 社会に出ることへの意欲

調査結果は図5に示すとおりである。

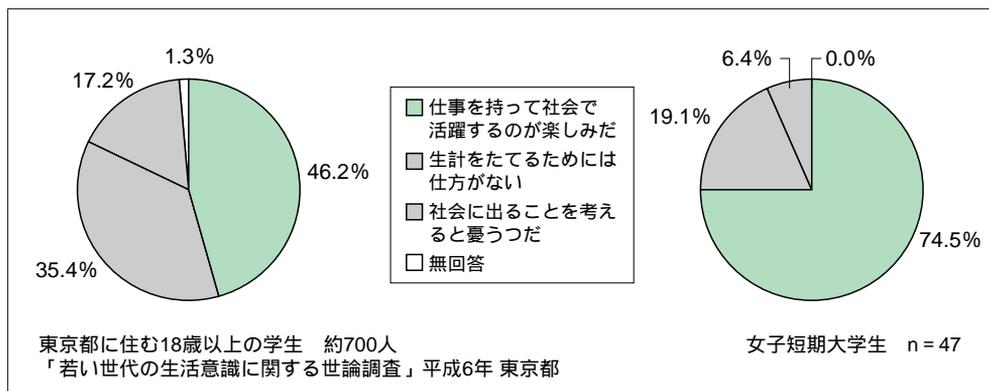


図5 社会に出ることへの意欲

学生の感想から抜粋

- ・社会奉仕や自分を生かすことを楽しみにしていいことだと思う。
- ・心配はあるけど、楽しみである。
- ・不安を抱えている人もいるのだなあ。
- ・もしかして自分のやりたいことが見つからないのかもしれない。
- ・「生計を立てるためには仕方がない」・・・本人の考え次第だと思う。
- ・仕事に就くことに楽しみを持たない人が28パーセントもいることに驚いた。

今回対象の学生は、将来の職業を意識してこの学科を専攻しただけのことはあり、仕事に対して夢や希望を抱き将来の自己の進路についてよく考えている。大学卒業後も引きこもりやフリーターとなる者が増加し、最近ではニートと言われる若者も出現し増加の傾向にある中、良好な結果が出ている。しかし、少数ではあるが、自己卑小感、将来に対しての自信のなさ、冷ややかな現実認識というのがあるようで、仕事を単なる生活の糧を得る手段とみなしている者もいる。

働くことの大切さや、自分の希望や将来の職業について考える契機として、子どもたちとのかかわりなど少しでも多くの体験を積み重ねる必要を感じている。教育実習への意欲付けやボランティア活動への参加の奨励など推進しなければならない。

5 豊かな人間性を備えた保育者

2年生は二度にわたる幼稚園教育実習、一度の保育実習を経験している。十分とまではいえないにしても、身をもって子どもとかかわり、指導して下さった保育者とかかわり、保護者とかかわり、少しばかりではあるが地域ともかかわりを持った学生である。

学生の記入したもものから抜粋

Q① 豊かな人間性を備えた保育者とはどんな保育者をいうのだと思いますか。

- ・人に対して寛大な心を持っている人
- ・感受性が豊かで多くのものに感動する人
- ・子ども一人一人を理解してあげられる保育者
- ・向上心を持つ人
- ・子どもたちと一緒に楽しんだり悲しんだり悩んだり喜んだりできる人
- ・臨機応変に対応できる人
- ・明るくやさしく包容力のある人
- ・広い心で胸にゆとりを持って、それぞれ個にあった援助のできる人
- ・「生きる力」を持っている人

Q② 自分自身を振り返って、不足しているものがあるとしたらどんなところだと思いますか。

- ・自然に対する興味や関心
- ・探究心・研究心
- ・それぞれの子どもを見る力

- ・保育に関する専門知識や技術
- ・柔軟性

Q③ それは、どうすることで克服できると思いますか。

- ・たくさんの自然に触れ、疑問を持ち、様々な体験をする。
- ・自ら進んでコミュニケーションをとる。多くの人とかかわる。
- ・たくさんの専門書を読み、知識を豊かにする。
- ・いろんなことを知り、自分のものにして自信を持つ。
- ・たくさん子どもと出会い、たくさん子どもとかかわる。

Q④ 豊かな人間性を備えた人になるために、幼いころどんな経験をさせる必要があると思いますか。

- ・自然と多くかかわらせて感受性を豊かにさせる。
- ・動植物に触れる機会や、多くの人とかかわる機会を持つ。「死」の場面にも出会わせる。
- ・思いっきり遊ばせて体験を多く積ませる。
- ・楽しい経験ばかりでなく、悔しかったりつらかったりする経験もさせる。
- ・農業体験をさせる（汗を流す、作物を作る大変さ、農家への感謝、収穫の喜び）。
- ・お年寄りとかかわりや地域活動や地域行事へ積極的に参加させる。
- ・周りとは協力する、自分をコントロールする、自分の意思をはっきり伝えることを体験させる。
- ・日常生活の中でいろんな体験をさせる（けんか、水遊び、虫や動物との触れ合い）。

この調査にあたって、事前に体験活動の重要性や必要性について説明や注釈をしたわけではないが、学生は自分自身の体験活動等これまでの育ちに対しての振り返りと、教育実習における実際子どもたちとかかわりを通して、幼いころの体験活動の重要性、必要性を実感している。

中央教育審議会答申「幼児期からの心の教育の在り方について」（平成10年6月）では、「生きる力」の核となる豊かな人間性に関する感性や心を次のように整理している。

美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性

正義感や公正さを重んじる心

生命を大切に、人権を尊重する心など基本的な倫理観

他人を思いやる心や社会貢献の精神

自立心、自己抑制力、責任感

他者との共生や異質なものへの寛容

「生きる力」「体験活動」「豊かな人間性」の関連については「Ⅰ はじめに」のところでは触れたが、これらを参考に考察すると調査対象の学生は体験活動の重要性、中でも乳幼児期における体験活動がいかに重要であるかということに関して、実に多くの大切なことがらに気づいている。このことを自分のことと重ね合わせて、しっかり理解、認識した上で、保育者として子どもたちとかかわることは、これまた非常に意義深いことである。

6 保育者としてのプロ意識は育ってきているか

1年生を対象に、本学に入学して前期を終えるにあたり自分自身を振り返る機会を作った。
学生の記入したのから抜粋

- ・たくさんの講義を受けて、自分の考えが甘すぎたことを日々実感した。子どもを見る目も変わってきているかもしれない。
- ・今は知識を育てていく段階なので、なかなか難しく頭を悩ますことも多かったが、保育者になりたいという気持ちは大きくなってきている。
- ・保育に関して多くのことを学びより多くのことを知るにつれて、保育者になれるだろうかという新たな不安も生まれた。と同時に一歩ずつ理想の保育者に近づいている気もする。
- ・様々な授業で保育に関する専門的な分野を学んでいく中で、保育者になりたいという思いはよりいっそう深まったが、同時に、今までの自分の中の甘えも感じた。
- ・保育者の役割はたくさんあり、これから解決しなければならない課題をたくさん見つけることができた。

短期大学の2年間で、保育者としての気概作りをし知識を豊かにし技術を身につけるといふハードなスケジュールの中にあつて、対象の学生は高校を卒業してわずか4ヶ月ではあるが、保育者を目指すという目標を持っているだけに、彼女らの変容、成長ぶりには目を見張るものを感じている。

Ⅳ おわりに

現在用いられている幼稚園教育要領の第1章総則には、多岐にわたる保育者の役割の中で主に子どもとのかかわりという点から考えてみると、「教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない」との文言があり、「幼児の精神的拠り所」「憧れを形成するモデル」「幼児との共同作業、共鳴者」「幼児の理解者」としての役割が期待されている。保育所保育指針においても、第3章から第10章までの年齢別保育内容の中に「保育士の姿勢と関わりの視点」が設けられ、子どもの発達に関して保育者の適切な関わりの重要性が強調されている。

専門職としての保育者の責任は、子どもの幸せを第一に考えることであり、子どもの生きる力をはぐくむことである。子どもの最善の利益を尊重することである。子どもの生きる力を守りはぐくむこととは、生命を守り、具体的に必要な世話をしながら、子どもの成長に即して子ども自らが自分の健康や安全に気遣い、生活の仕方を身につけ、その子らしく自立に向かい成長していくよう指導、援助していくことである。

子どもの中に潜在する「生きる力」は、自分の置かれた環境の中でしっかり生きていこうとする能力である。これは誰にでも備わっているものであるが、より多くの経験をすることによって、今後さらに急速に変化していくであろう社会の中でも生き抜いていく力となると考えられる。

保育という営みは、大人と子どもが相互の信頼を基盤に共同の生活を生み出すことである。

そして、その基本はかかわりというコミュニケーションであり、いかに人間関係を構築していくかという保育者の力量が問われる。保育とは何かということを経験的に理解したとしても実践的にいかにかかわるかという問題になると、学生自身の自己表現力や技術的表現力、さらには学生自身の成育過程における生活体験や感情体験といったものが総合的に影響してくる。ほとんどの学生は子どもとのかかわりを持った経験が少ないために、子どもの視点を理解したり、受容的なかかわりのあり方を理解した上で必要な見守りをしながら養育したりする姿勢や態度が十分できていない。自分の人間性を生かしながら、いかに実践的にかかわりを実現していくかという力量が求められるわけであるが、臨機応変に、一人一人の子どもの心に寄り添って、その心の動きに敏感にしかも温かく受け止めて応じなければならない。

このような力量を育成するにあたっては、学生自身が自分自身をいかに捉えているか、つまり、自分自身の可能性と限界、他者との関係性の築き方、感情表現の仕方などについての自己への気付きや認識が重要になる。これまでの体験活動が十分とまでは言えない学生、中でも保育者を目指している学生に対してのカリキュラム編成に当たっては、可能な限り直接的な経験を保育者養成の仕組みとして用意していかなければならない。保育者は人を育てる人である。子どもと直接かかわる機会を多く持たせたり、筆者の(つたないけれども)人生観や保育観を伝えたり語り合ったりすることなどを通して、自分自身も育つことなしには保育は不可能であることを自覚させることが重要である。そして、そのことはそっくりそのまま筆者にも向けられることでもある。

豊かな人間性を備えた保育者、社会のニーズに応えられる質の高い専門職としての保育者を養成することの社会的使命と責任の重大さを痛感しているところである。

【引用・参考文献】

- 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館(平成11年)
 厚生省「保育所保育指針」(平成11年厚生省発表の全文)フレーベル館(平成11年)
 文部省中央教育審議会答申：青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について(平成10年)
 文部省中央教育審議会答申：「幼児期からの心の教育の在り方について」(平成10年)
 文部省中央教育審議会答申：新しい時代を拓く心を育てるために - 世代を育てる心を失う危機 - (平成10年)
 文部省中央教育審議会第一次答申：「生きる力」(平成8年)
 鹿児島県総合教育センター短期研修講座資料：「道徳性の芽生えを培う幼稚園教育」(平成14年)
 保育士養成研究 社団法人全国保育士養成協議会 第21号(2003)
 鹿児島県教育委員会 新世紀カリキュラム審議会答申(平成13年)
 日本教育 社団法人日本教育会 No.322(平成16年)
 人間関係トレーニング 第2版 「私を育てる教育への人間学的アプローチ」津村俊充・山口真人編 ナカニシヤ出版(1992)
 女子教育 目白大学短期大学部女子教育研究所所報 No.27(2004)